

解答

□

問一 強い木枯らしが吹く中、冷たく寒い冬の田圃路を、三人の小さな子供たちが、必死に少しずつ歩き進む様子。

問二 念願がなって汽車で登校できるはずだったのに、父親のせいで汽車に乘れなくなり、落胆と父への憎しみで心がいっぱいになっていたから。

問三 私たちだけ歩いて帰らないといけないなんて、お父さんはひどい。

問四 朝、私たちを汽車に乘せなかったことを気の毒に思い、丈夫な子は雪でも歩け、という自分の説を曲げてでも私たちの機嫌をとりたいのだ、と意地悪く受け取った。

問五 自分のつむじ曲りによる拒否ではなく、あくまでも父親の言葉に従っているだけだから、人力車に乗ってはいけなと妹を納得させ、自分を正当化しようとする思い。

問六 もし、姉の言葉をそのままとらえて人力車に乗ったら、明日からはもう学校につれて行かない、という仕返しの意味が含まれているから。

問七 妹に申し訳なくて謝りたいのに、そんな気持ちとは反対の冷たいことしか言えず、後悔し、自分を責める気持ち。母の温かいいたわりによって、寒い中、遠い道のりをずっと歩いてきた疲れやつらさ、姉の冷たい言動など、ずっと我慢していたものが一気にふき出したから。

問九 父親に抱いた怒りや仕返し、幼い妹への冷たい仕打ちなど、何も言わなくても母親は知っており、自分でも後悔していることを母親にとがめられ、あらためて自分の言動が情けなく思われたから。

問十 私が自分の言動を後悔し、苦しんでいることを察し、もう責めずにいたわってあげたいと思った。

問十一 自分の意地を通したためにいろいろな人を傷つけてしまい、そんなことをした自分が情けなく、傷つけてしまった人たちに申し訳ないから。

問十二 丈夫な子供は雪の中でも歩きなさい、他の子は乗らないのに自分たちだけが人力車に乗ることはよくない、という父親の言いつけを忠実に守った、と解釈している。

□

① 官製

② 鉄棒

③ 予防

④ 奮発

⑤ 副業

⑥ 張

⑦ 尺度

⑧ 民族

⑨ 判明

⑩ 暴

⑪ 肥料

⑫ 蔵書

⑬ しよう

⑭ あんび

⑮ おくがい

⑯ さとごころ

⑰ ぼくよう

⑱ おうねん

⑲ ぶさほう

⑳ せきはん

解説

□

問一 歩く様子を「コトコト」という擬態語で表している独特な表現です。「ひろびろと吹きさらす田圃路」「木枯らしに吹き飛ばされるように」などと「小さい私たち」「一吹き風に飛ぶてしまいそうな小さい子供」などの表現の対比から、冷たく厳しい自然の中を一生懸命に少しずつ歩く「私」たちの様子を想像するとよいでしょう。

問二 傍線②までの「私」たちの大きな心情の変化をていねいに追いましょ。ふだんから羨ましく思っていた汽車に乗って学校に行つてよいとお母さんから言ってもらえたのです。「大喜びで鞆を背負うと、庭先へとび出しました。」や「私たちが大喜びしたのも無理はありません」などに、登場人物の心情が直接描かれています。しかし、これがばったり逢ったお父さんの言葉によって一変してしまいます。「私はその時ほど、黙ってあるき出しました。」「けれど、私は手をつっぱりました。」などの表現から、お父さんへの憎しみや怒り、どれほどがっかりしたかを読みとりましょ。

問三 「――」は「ダッシュ」「中線」などとよばれます。物語文や小説の中で、言葉を省略することによって余韻を残したり印象を強くしたりする場合に用いられます。省略されている言葉は、多くは直前に書かれています。ここは、「この雪の中を、またあるいて帰るのか。」「お父さんを憎らしがらないではいられませんか」に着目ましょ。「自分たちだけは歩かなければならない」というつらさやお父さんへの腹立ちが強調されているのです。

問四 傍線④の直後『お父さんはどうとう、もともと意地わるくなつたものです。』に着目して解答を導きます。「私」は、おとうさんのはからいを、単純に自分たちを喜ばせようとしたものではなく、つらい思いをした自分たちのご

機嫌を取ろうとしたものだといひにくれたとらえ方をしています。

問五 傍線⑤の「私」の言葉の真意は、「けれど、私の心のうちに、ほんとうにそういう気持があったのでしょうか。」以降に表れています。本当は自分も人力車に乗りたいたけれど、お父さんに対する意地から乗りたくない、妹にも乗ってほしくない、というのは「私」の単なる身勝手です。幼い与志子はこの姉には素直に従うことはできないでしょう。ですから、すべては父親の言いつけであり、きちんとそれを守るべきなのだ主張して自分の真意を隠したのです。

問六 「言葉の針」とは「人を傷つける言葉」という意味で用いられています。ここでは、与志子にとって、姉の言葉に素直に従った後で何が恐いのか、何が困るのかを考えましょう。「いえ、明日も又学校へつれて来てもらうことさえなかったら——」という言葉より、姉を裏切ってひとりだけ人力車に乗ったら、明日からはもう姉に学校につれて来てもらえない、たったひとりで一里もの道を歩いて学校へ行かないといけなくなるだろう、ということをおそれていることがわかります。

問七 「私」は与志子のいじらしい心持を察し、謝りたい気持ちでいっぱいだったにもかかわらず、口から出てきた言葉は、心とは反対の意地悪な言葉だった、とあります。傍線⑦のときの「私」の気持ちは、与志子に対するおわび、自分の言動に対する後悔などが考えられます。

問八 与志子が置かれている状況をていねいに読みとりましょう。小さい与志子にとって、吹雪の中の一里の道のりはとても遠くつらいものだったのです。また、お姉さんの意地っぱりさえなければ楽でしたのですから、がっかりする気持ちやつらさはより大きかったことでしょう。そんな中、家に着いただけでもほっとするところ、お母さんに温かく迎えられる、お姉さんのことをたしなめてくれたのですから、緊張が解け、今までずっと我慢していたつらさや疲れがどっと出てきたのです。

問九 問五のように、どんなに父親の言葉をもち出して妹を納得させても、「私」の強情っぱりや妹への冷たい仕打ちはお母さんにはお見通しでした。「私」は自分の言動について罪悪感を抱いています。そこを母親から指摘され、とがめられたのです。傷口に触れられるようになつたさがあつたと想像できます。

問十 最初は「私」の強情をとがめていた母親ですが、言い返すことも謝ることもできずただ黙っている「私」を見て、えられます。優しい言葉をかけて「私」の気持ちを解きほぐそうとしているのです。

問十一 「自分の意地を充分に通してしまった」の具体的な内容を考えます。ここでは、せっかく自説を曲げてまで「私」たちのために人力車をよこしてくれた父親の優しさを拒絶したこと、小さな妹まで吹雪の中を歩かせた上に冷たいこと言ったこと、を指しています。その結果、父親の気持ちを踏みつぶしてしまったことへの罪悪感、妹にひどい言動をしてしまったことへの後悔、そんなことをした自分への嫌気など、悲しい気持ちばかりが残ってしまったのです。

問十二 「ふだんお父さんがあんなに云っていた」この内容を明確にします。今朝の父親の言葉から「うちの子供たちを乗せたらば、みんな他の子供たちも乗せなければならぬ」「丈夫な子供は雪の中でも歩くのだ」の二点を指摘しましょう。父親は、「私」がこの自分の言葉を守るために人力車に乗らずに歩いて帰ってきたと解釈したのです。

二

① 「官製」は同音異義語が多く、「管制」や「官制」などとまちがえないようにしましょう。

② 「やがい」と読まないように気をつけましょう。「屋外」と同じ意味の「やがい」は「野外」と書きます。